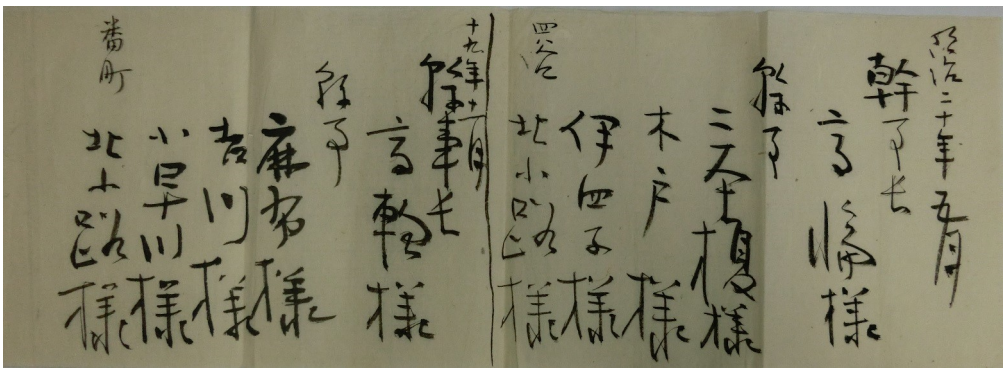
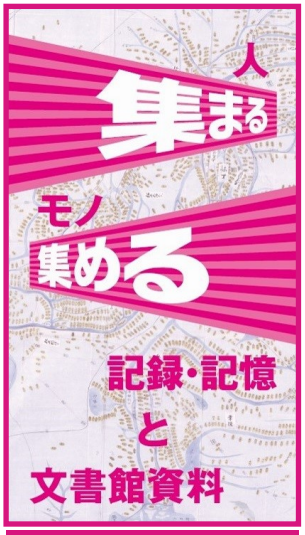


明治二十年五月	十九年十一月
幹事長	幹事長
高輪様	高輪様
幹事	幹事
二本榎様	麻布様
木戸様	吉川様
伊皿子様	小早川様
四谷	番町
北小路様	北小路様



⇨ 4

御宗族懇親会一件書類より（毛利家文庫３公統256）

人 ④

明治期、毛利家に集まる人々（１）

《明治の世になって》

明治の世になり、萩（長州）藩主であった公爵毛利家の人々は東京に住むことになりました。新たな生活の中で、数々の「集まり」がありました。ここでは、当時記された日記から、毛利家の人々がかかわった「集まり」を垣間見たいと思います。

《宗族懇親会》

毛利家が東京に居を移したとは言え、山口との関係が途切れたわけではありませんでした。

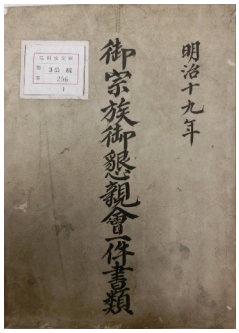
まずは毛利一族の集まりから見てみましょう。年始や年忌法要などの集まりもありましたが、ここでは「宗族懇親会」と言われる会を取り上げます。

「宗族懇親会」には、公爵毛利家とその子息、末家と呼ばれた人々（長府毛利・徳山毛利・清末毛利・岩国吉川）に加えて、先祖を同じくするとして新たに加わった北小路家、さらには木戸孝允家の人々が集まりました。当初は毎月第３土曜に開催されていたようですが、時代の経過とともに、春と秋の年２回の開催へと変化していました。会場はまちまちですが、多く使われたのが芝にあった紅葉館（こうようかん。跡地は現在、東京タワーが建っています）。高級料亭を使って開催されていました。

上の写真は、「宗族懇親会」に関する資料の中で、明治19年（1886）11月と、明治20年５月に開催された会に関するものです。この頃の宗族懇親会には幹事長と幹事が置かれ、会を運営していたことが窺えます。この時の２回はいずれも幹事長を「高輪様」、つまり公爵毛利家がつとめています。また、幹事は複数の家が輪番でつとめていたようです。

《旧臣隔月懇親会と例会》

旧萩藩士とのつながりも健在でした。例えば「旧臣隔月懇親会」という懇親会。その名の通り２ヶ月に１度、こちらも当初は



御宗族御懇親会一件記録
（毛利家文庫３公統256）

この資料には、御宗族御懇親会の参加者名簿など５点が入っています。

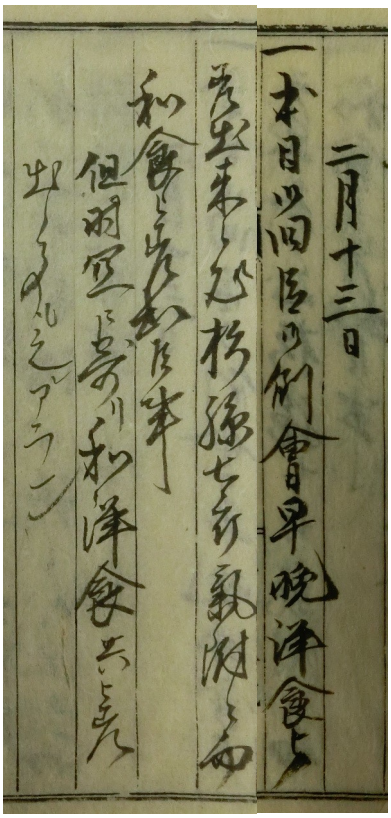
表題には明治19年とありますが、左上の写真にもあるように、翌20年のものも含まれています。

「御宗族御懇親会」の実態が窺える数少ない資料のひとつです。

第３土曜日に開催されていました。スタートは明治11年（1878）と考えられます。

類似の集まりに「例会」と日記に記されるものがあります。「例会」とだけしか出てこないので、特定の一つの会を指すのか、複数の会ながら定期的に開催されるものそれぞれを表しているのかはより精査が必要ですが、「例会」は毛利家一族と旧臣が集まる会であったことはわかります。例えば、明治15年７月13日の記事には、吉川経健・小早川三郎・杉孫七郎・林友幸・野村素介・山尾庸三・槇村正直・毛利重輔・高杉丹治・岡義亮などの名が「来会員」として挙がっています。

一方で前出の「旧臣隔月懇親会」の会員の名前は日記上には出てきませんが、開催案内の通知を80通前後出した記事が散見し、多人数で構成されていたとが窺えます。そこから、「旧臣隔月懇親会」の会員とこの「例会」に加わる旧家臣の人々は重複していたと考えられます。おそらくそうしたことから、「旧臣隔月懇親会」と「例会」は明治12年、合併して同日開催へと変更されたのでしょう。その後、「故旧懇親会」などとも呼ばれた会は、明治21年には年１回の開催となりました。



毛利家文庫5忠愛公　107（6の3）

「御次雑事録」明治九年二月十三日条より

二月十三日

一、本日御旧臣御例会、早晩洋食被差出来候処、杉孫七郎気附二而和食被差出候事、

但、時宜ニ寄リ和洋食共被差出候事もゝレアラン、

上の写真は、明治９年（1876）２月13日の記事です。

これに先立つ１月13日、「年始会」と称する会が催され、伊藤博文・山縣有朋・杉孫七郎らが毛利邸に集まりました（木戸孝允は病欠）。この時は洋食が出されたそうです。

翌月に開催された２月13日の「御旧臣御例会」では、これまでの例に倣って洋食を出そうとしたところ、杉孫七郎から和食にするよう指摘がありました。

但書には、「時に応じて和食を出したことも洋食を出したこともあったけれど…」とあって、杉の指摘に対する毛利家の担当者のつぶやきが聞こえてきそうです。和食を出すのか洋食を出すのかが問題となるところは、それ以前にはなかった明治時代ならではのエピソードとも言えそうです。